弥勒　ーバハイの視点からー

ジェーン・ゴールドストン

<概要>

仏教徒の間でも学者の間でも、弥勒信仰というものは、関心を持たれ続けてきました。仏教徒は、約2500年の間、宗派を問わず、ブッダに次ぐ存在として、未来仏である弥勒に畏敬の念を持ってきました。末法の暗い時代においては、弥勒が将来成仏する、つまり悟りを開くという教えによって、信者たちは希望を与えられ、また、やがて黄金時代が訪れて、永遠に説かれてきた法が継続されるのだ、という確信を持つこともできました。

一方、学者の間では、１９世紀になって、弥勒のお経とその解釈が、パーリ語や中国語から、部分的に翻訳されるようになりました。さらに、ここ１０年位の間に、地域研究などさまざまな分野の学者たちの間で、弥勒信仰の研究に対する関心が沸き起こって来ています。

そして、多くのバハイも、同様の深い関心を、弥勒に対して持っています。なぜかといいますと、アブドル・バハによる、「仏教の予言はあくまでも象徴であり、比喩であると考えるべきである」というお言葉と、ショーギ・エフェンディによる、弥勒とバハオラの関連性を明確にした言葉があったからです。このようなバハイ達の深い関心は、宗教徒としての意識、つまり、弥勒の予言が実現したという認識を持つこと、と同時に、仏教学に関心を持つ者としての意識、この両方から生まれたものなのです。

私がこの論文を書いた意図は何かと言いますと、第一に、初期の仏教経典に書かれているところの弥勒伝承の要旨を紹介すること。そして、第二に、この伝説の中の予言が、バハオラに、どのように実現されたかという解説をこころみることです。